

皮肉家？ ホメーロス

生田康夫

まえがき

ホメーロスの詩篇には驚嘆すべきことがたくさんある。そのうちの一つがそこにかがわれる「皮肉」だ。

人類にとってほとんど最古の作品であつてみれば、それは単純素朴な心の動きの直接的な表現で満たされていると予期しそうだ。ところが事實はそうではない。むしろ、古代人ならでの真情が簡勁な表現を得ている箇所は多い。しかし一方そこでは、成熟した文明において様々な歴史・経験を聞いた人々にしか想定しえないような屈折した心情の微妙な表現にもしばしば出会う。

詩篇において登場人物の発する「皮肉」はその最たるものである。

パトロクロスの発するこういう言葉がある。

戦闘でトロイア方の一人ケブリオネースを討ち取り、その男が戦車からもんどりうって落ちた時に言い放った言葉だ。

おおなんといいことだ、まったく身軽な奴だ、なんとやすやすと飛び込むものだ。もしどこか魚多き海においてだったら、こいつはたくさんの牡蠣を探り当てて大勢を満腹させることだろう、いかに時化のときだろうと船から飛び込んで。今こいつは野で馬からそれほどやすやすと飛び込んだ。いや全くトロイア勢には軽業師がいることよ（『イーリアス』第十六歌745〜750行）

戦闘のさなかである。それなのに皮肉を、ここまで手の込んだ

だ皮肉を言わしめている。

そしてさらに、パトロクロスはアキレウスの僚友だが、アキレウスとは対照的に性格は穏和、仲間からは「誰にも優しくすることを心得ていた」と言われていた。そのパトロクロスをしてこれほど辛辣な皮肉を言わしめている。(パトロクロ스는この直後ヘクトールに討たれる。このような皮肉は悲痛な運命の予兆であったのかもしれない)

ホメーロスはよほどの皮肉家だったのだろうか。それとも、ホメーロスの時代の人々が皮肉好きであり詩人はそれを忠実に描いたということなのだろうか。

詩人がどんな皮肉を描いているか、それを念頭に読み返してみよう。このような切り口によってホメーロスの両詩篇に新たな光を当てることができるかもしれない。そしてまた、西洋の文学哲学におけるアイロニーの系譜を考えると、その淵源に位置するホメーロスの皮肉に思いをいたしてみることがあながち無駄ではなからうと思われる。

A. 『イーリアス』最初の皮肉——「従わないと思うのだ」

『イーリアス』で最初に皮肉が登場するのはどこか。第一歌のアガ멤ノンとアキレウスとの間の応酬で早速登場する。

アガ멤ノンはアキレウスに対し、「奪っている女を返す

べし」と言われたことに激高し、さんざん罵った挙句こう言う。

しかしこいつ（アキレウス）は他の全ての人々の上に立ちたがっている、全ての人を支配し、全ての人に君臨し、全ての人に指図したが、だがそれには誰か従わないと俺は思うのだ（『イーリアス』第一歌 287～289）

「全ての人」を三回繰り返した挙げ句「誰か」と言って、対照を際立たせている。この従わない「誰か」はもちろんアガ멤ノン自身なのだから、従わないと「思うのだ」というとほげた措辞自体既にして皮肉の気味がある。

しかしそれにとどまらない。それに対してアキレウスは言い返す。

俺は「卑怯者」とも「とるに足らない奴」ともいわれるであろう、もしもお前の言うこと全てに俺が従うのであれば。そんなことは他の者に命じろ、決して俺に指図するな、というのもう俺はお前に従わないと思うのだ（『イーリアス』第一歌 294～296）

アガ멤ノンの「誰か」従わないと思うのだ *ov̄ tēlōēthai oīa*」に対してアキレウスの「俺は」従わないと思うのだ *ov̄ tēlōēthai oīa*」だ。皮肉を皮肉で切り返している。

B・戦場で敵に向けた皮肉

『イーリアス』はなんと言っても戦場が主要舞台である。戦場では矛でのみ戦うのではない、言葉をも戦わせる。そしてそこでは皮肉が活躍する。まえがきで引用したパトロクロスの放つ皮肉はその典型的な一例だが、その他にも枚挙にいとまがない。主なものを挙げよう。

B―a「悪い仲人ではない」

トロイアの戦士オトリュオネウスは、アカイア勢を追っ払ってやると広言し、その約束のもと、プリアモス王からその最も美しい娘カッサンドレーを持参金なしで娶ることに承諾を得たのだった。そのオトリュオネウスをイードメネウスは討ち取って言う。

俺たちもお前にそれを約束して果たすだろうよ、アトレウスの子（アガ멤ノン）の娘たちの中の最高の器量よしをアルゴスから連れてきて娶らせようと。もしお前が我らと共に構えよきイーリオスの町を攻略してくれるのなら。さあ一緒に来い、海に行く船の傍らで婚礼について取り決めをすべく。というのも、俺たちとても決して悪い仲人ではないのだから（『イーリアス』第十三歌 377～382）

死者生前の大言壮語に対する嘲弄を込めた皮肉だ。

B―b「付き添いをつけてやった」

トロイア方のデーイポボスは味方のアーシオスの死に怒り、敵の武将ヒュプセーノールの命を奪う。そして言う。

アーシオスは仇を討たれることなく斃れているのではない、彼は逞しい門番の冥王の館にも心に喜びつつ行くであろう、付き添いを付けてやったのだから（『イーリアス』第十三歌 414～416）

失った味方アーシオスのあの世への旅路に「付き添いをつけてやった」と。仇をとったことを洒落のめした皮肉だ。

B―c「馬が鷹よりも速くあるように」と

アイアースがヘクトールに対して言う。

お前自身にその時が近づいていると思うぞ、逃げつつ父なるゼウスと他の神々に鬩美しき馬が鷹よりも早くあるようにと祈る時が、お前を町へと砂煙を上げて野を運ぶ馬が（『イーリアス』第十三歌 817～820）

勇士にとつて背を見せて逃げることは恥辱だ。起こるであろ

うその必死の様を、「馬が鷹よりも速くあるように」とか「砂煙を上げて」とか、ありありと描き出して皮肉っている。

B—d「白い肌を引き裂く」

ヘクトールは大アイアースに向けて言う。

(全アルゴス勢に禍がもたらされる)その中でお前は斃れるだろう、もし俺の長槍に向かう勇氣があるなら、その長槍はお前の白き肌を引き裂くであろう (『イーリアス』第十三歌 828～831)

「白き肌 $\chi\rho\acute{o}\alpha \lambda\epsilon\iota\pi\acute{o}\nu\epsilon\upsilon\tau\alpha$ 」と言っている。アイアースはアカイア勢で武勇一、二を争う猛者なのだから「白き肌」はない。皮肉だろう。更に $\lambda\epsilon\iota\pi\acute{o}\nu\epsilon\upsilon\tau\alpha$ は $\lambda\epsilon\iota\pi\acute{o}\nu$ (百合) の派生語であるともされる。するゝ $\chi\rho\acute{o}\alpha \lambda\epsilon\iota\pi\acute{o}\nu\epsilon\upsilon\tau\alpha$ は「百合の如き肌」とすべきかもしれない。それであれば一層の皮肉だ。

B—e「杖について」

プーリュダマスがアカイア方の一人を槍で屠ってこう言う。

アルゴス勢の誰かが(その槍を)身に受けた、きつとぞいつはそれに杖ついて冥王の館に下つて行くと思うぞ (『イーリアス』第十四歌 456～457)

前に、味方の仇をとった時、味方のあの世への旅路に「付き添いをつけてやった」という皮肉があった(B—b参照)。ここでは槍で斃した敵に對して、その槍に「杖ついて」あの世への旅路に行くであろうと皮肉っている。いずれも、「死出の旅路」をあたかも現実の旅であるかの如く仮想する諧謔だが、そこで敵するもの(仇、槍)を添わせるところに皮肉な一捻りがある。

B—f「踊れなくしてやる」

アイネイアースがメーリオネースめがけて槍を放つ。メーリオネースがすんでのところを身をかがめてよける。そこでアイネイアースが言う。

メーリオネースよ、お前がいかにすぐれた踊り手であろうと、俺の槍が当たりさえすればお前をすぐにも永遠に踊れなくしてやったものを (『イーリアス』第十六歌 617～618)

相手の命からがらの動きを楽しみの所作になぞらえている。皮肉である。

B—g「むつかしいと思うぞ」「子供だ」

アキレウスとアイネイアースの二人が両軍の真ん中で相対したときアキレウスは言う。

それともトロイア人達はお前に、もし俺を討ち取ったなら美しき果樹園と畑、他にまさる領地を住まいとすべく割き与えると約束したのか。しかしそれをなすのはむつかしいと思うぞ（『イーリアス』第二十歌184～186）

そして更に続ける。

群の中に引つ込め、俺に立ち向かうのはよせ、ひどい目に遇わぬうちに、事が成ってから気づくのは子供だ（『イーリアス』第二十歌197～198）

「お前には）出来っこない」とでも言うべきところを一見控えめに「むつかしいと思うぞ」と表現するのも、そして最後の「事が成ってから気づくのは子供だ」と一般論的に表現するのも皮肉だ。

これに対してアイネイアースは言う。

ペーレウスの子（アキレウス）よ、俺を子供のように言葉でもって怖がらせようと思うな、俺自身も愚弄や侮辱を述べ立てることはよく知っているのだから（『イーリアス』第二十歌200～202）

そしてこちらにも更に続ける。

（というのも、双方に言うべき何とも沢山の悪口（あつこう）があつて、それは百の権座の船でも積み込めまい。人間の舌はよく回り、あらゆる種類の沢山の言葉があり、言葉の野はあちらにもこちらにも広がっている（『イーリアス』第二十歌246～249）

「子供のように」とアキレウスの言葉を用いて応えている。

そして「愚弄や侮辱を述べ立てることは知っている」、確かにホメーロスの登場人物はほとんど皆雄弁でありアイネイアースも例外ではない。その程はこの「というのも、双方に」以下の弁舌が遺憾なく証している。

悪口の野は肥沃であり、そこで皮肉は様々な毒の実をならせて大いに繁茂しているようだ。

B—h「心を痛めるでもなく」

アキレウスは今討ち取ったリュカーオーンの死体に向けて言う。

さあそこで魚たちと共に延びている、魚たちが心を痛めるでもなくお前の傷口から血を舐めてくれるだろう。そして母親がお前を床に横たえて悲嘆することはなからう（『イーリアス』第二十一歌122～124）

「心を痛める」はずもない魚たちを描き出すのは「悲嘆する」

であろう母親との対比で残酷な皮肉である。

B—i「不幸な者の子」

アキレウスは自分に向かってくるアステロパイオスに対してこう言う。

いったいどこの誰だ、俺にあえて向かってくるとは、不幸な者の子が俺に刃向うのだ（『イーリアス』第二十一歌150

～151）

「不幸な者の子が俺に刃向う」は、噛み砕いて言えば（若干くどくなるが）「俺に刃向う奴の親はその戦いで子を失って不幸に沈むことになるぞ」ということだろう。それを「不幸な者の子」と決めつけている。不幸は戦いの結果であるはずなのに既定の事実として取り扱っている。そこには皮肉がある。そしてそれを言うにあたって子を失う親の視点が導入されている。この皮肉は悲哀を含んでいる。

これと同様の「決めつけ」による皮肉が、もう一箇所出てくる。それは戦場においてではないが、ここで引いておこう。

パトロクロスの葬送競技の拳闘の場面、褒美は勝者には六歳の騾馬、敗者には両柄の盃だった。拳闘の自他ともに認める第一人者エペイオスはこう言い放つ。

両柄の盃を持つていく者は誰でも近くに來い（『イーリアス』第二十三歌667）

そしてこうも言う。

彼の身内の方々はこの場にそろって控えていただいた、拙者の拳のもとに倒された彼を運ぼうがために（『イーリアス』第二十三歌674～675）

対戦相手はまだ特定されていないが負けると決めつけられている。同様の自信に満ちた皮肉である。

B—j「扱いやすいではないか」

ヘクトールがアキレウスに斃されたとき、トロイア方の战士们が駆け寄り、皆その死体に槍を突き立て互いに「こう言い交す。

ほう何と、ヘクトールはまったくもってはるかに扱いやすいではないか、燃えさかる火で船を焼いた時（の彼）よりは（『イーリアス』第二十二歌373～374）

「扱いやすい」と訳した詩句原文は *jakakwreptos augeudatou* で、直訳すれば「周りを触れるにはより柔らかい」だ。槍を突き立てておきながら「周りを触れる」とは皮肉だ。

C. 戦場で味方に向けられた皮肉

戦場では、敵のみが皮肉の標的になるのではない。非勢にいらだつた時の言葉の中で、あるいは叱咤し鼓舞する言葉の中で、しばしば味方が皮肉の標的となる。

C—a 「麻の網にでもかかって」

サルベードーンは戦場で味方の大将ヘクトールを罵って言う。

ヘクトールよ、そなたの前に持っていた力はどこに行つたのだ、軍兵や加勢なしにひとりで婿や兄弟と共に町を守つてみせると言っていたではないか。いま彼らの誰の姿も俺は目に見ることも認めることができない、それどころか獅子の周りの犬の如くに尻込みしているではないか（『イーリアス』第五歌472～476）

「彼らの誰の姿も俺は目に見ることも認めることができない」には既に皮肉の調子がある。さらに辛辣なのはその後だ。

お前たちが全てを捕らえる麻の網にでもかかって、敵の奴らの餌食か分捕り品にならねば良いが（『イーリアス』第

五歌486～487）

まるでヘクトールとその兄弟たちを小魚か小鳥の群の如くに扱っている。

「ならねば良いが *fish food*」がここではいかにも皮肉な言い回しだ。表面上の意味は心配していることになるのだが、その実「なつてしまつてもお気の毒様、俺の知つたことではないぞ」といつた口吻だ。

C—b 「水と土になつてしまつたらよい」

一騎打ちを挑発するヘクトールに対しアカイア方は誰も名乗らない。それに苛立つたメネラーオスは味方の軍勢に言う。

おお口ばかりのアカイアの女達よ、もうアカイアの男達ではない。これはとんでもない恥辱だ、もしダナイオイ勢から誰もヘクトールに立ち向かおうとしないのなら。しかしお前達は皆水と土になつてしまつたらよい、そこに皆いくじなく不名誉にもじつと座り込んで（『イーリアス』第七歌96～100）

「アカイアの女達よ」もことに戦場においては皮肉だ。

しかし皮肉はその先まで行く。どうせなら女どころか（そして前項の魚や鳥以前の）「水と土」までなり下がつてしまえ、と。

Cic 「民の分際で」

トロイア方の知将プーリュダマースが大将ヘクトールに対して、攻撃を控えることを勧めて言う。

ヘクトールよ、そなたはいつも集会でよき意見を言う俺を責める、民の分際で異なった意見を言うことは、評定においても戦場においても、ふさわしくないと。とにかくそなたの権勢を高めるべきだというわけだ（『イーリアス』第十二歌211～214）

プーリュダマースは参謀なのだから、「民の分際で」はへりくだっているように実には、進言になかなか耳を傾けないヘクトールに対する皮肉だ。ヘクトールは頑迷なところもあったようだ。

これに対してヘクトールも言う。

たとえ他の者が皆アルゴスの船の傍らで討たれたとて、お前に死ぬ恐れはない、お前には戦いに耐える心がなく戦おうという気もないからだ（『イーリアス』第十二歌245～247）

「死ぬ恐れがない」のは「武勇で優れているから」かと思いき

や「武勇を持たぬから」だ、と。上げるかと見せて下げる皮肉である。

Cid 「破滅は安泰だ」

ヘクトールは戦場で多くの僚友の姿を求めるが見つからない。行き会ったパリスを罵って言う。

禍のパリスよ、見かけのみよくて女狂いの女たらしよ。どこだ、デーイポボスは、剛毅のヘレノスの殿は、アーシオスの子アダマースは、ヒュルタコスの子アーシオスは、そしてオトリュオネウスはどこだ。今や高く聳えるイーリオスは壊滅だ、今やお前にとって険しい破滅は安泰だ（『イーリアス』第十三歌769～773）

パリスは仲間を必死に戦闘へと励まし立てていたところなのだから、理不尽な悪罵だ。しかしヘクトールは不利な戦況に苛立っている。その苛立ちを弟にぶつけたわけだ。苛立ちのほどが最後の「今やお前にとって険しい破滅は安泰だ」にまで表れている。このanagnorisisを「破滅は安泰だ」と訳したのでは十分でない。単に「（破滅は）避けえない」との意にもなるからだ。もっともそういう解釈も成り立たないではないが、ここはヘクトールの口吻からいってやはり「（破滅は）安泰だ」の意の矛盾語法による皮肉ととりたいたい。

C—e「歩いて帰る」「踊りへではない」

アイアースは味方の軍勢を叱咤して言う。

「いったいお前たちは、もしヘクトールが船を奪ったなら、皆歩いて故郷に帰ろうとでも思っているのか。いったいお前たちは聞かないのか、ヘクトールが者共皆を駆り立てているのを、あいつは船を焼き尽くそうといきりたっているのだぞ。あいつは踊りへと促しているのではない、戦いへとなのだ（『イーリアス』第十五歌504～508）」

「もう船に乗って帰れないぞ」であれば普通だ。しかしそれは、皮肉を込めた「歩いて故郷に帰ろうとでも思っているのか」のインパクトには及ばない。

そして「踊りへと促しているのではない、戦いへとなのだ」。これも一種の皮肉だろう。

前に敵に対しても戦いが踊りに比されている皮肉があった（前巻B—f参照）。ここではそれが味方への叱咤激励において使われている。

「踊り」と「戦い」、それはいいかえれば「生の喜び」と「死の苦しみ」であり、二つは対蹠的なものであるのだがその一方、相手に呼応する動作において似通うところもある。それだけにこの対比には真実味があり、この皮肉には格別の切れ味がある。

C—f「お前たちに真っ先に」

これは人間に対する言葉ではない。ヘクトールは自らの馬に向かって、戦闘へと駆り立てるべくこのように呼びかける。

クサントスよ、そしてポダルゴスにアイトーンに輝きのラ
ンボスよ、今こそ俺に世話の恩返しをするのだ。その世話
というのは、大いなる心のエーテイオンの娘アンドロ
マケーがお前たちに真っ先にふんだんに与えた心に嬉しい
麦と、気の向いたときに飲むべく混ぜた葡萄酒だ、俺より
も前に、勇敢なる夫と誇る俺であるのに（『イーリアス』
第八歌185～190）」

動物を人間と同等に扱って「緒に分類するのめいかがなもの
かだが、馬は味方の重要な戦力なのだからここに含めることに
しよう。

「お前たちに真っ先に……俺よりも前に、勇敢なる夫と誇る
俺であるのに」。これは諧謔味に富んだ皮肉だ。これは皮肉だが、
そこにはお道化た調子がある。自分より飼う動物が優先される
主人の姿に自らをあえて貶めて、現代のペット社会にもありそ
うな自虐的ユーモアだ。ヘクトールはこのようなユーモア感覚
も持っていた。

D. 神々同士の皮肉

D—a「おまえは思う」

『イーリアス』最初の皮肉はアキレウスによる相手の言葉を使った切り返しだった。(前述 A 項参照) 同じような切り返しが神々の世界でもある。ヘーレーは夫ゼウスに対してこういう。

今私は心にひどく恐れるのです、海の老人の娘、白銀の足のテティスがあなたを言いくるめたのではないかと。というのも彼女は朝早くあなたのをばに座し膝にすがつていましたので。彼女にあなたは確と約束したと私は思うのです。アキレウスに誉れを与え、アカイアの船の傍で大勢の者を斃す、と (『イーリアス』第一歌 555～559)

これに対してゼウスはこう言い返す。

あきれた奴だ、いつもお前は思うのだ、それで俺がお前の目を逃れることはない (『イーリアス』第一歌 561)

このゼウスの「お前は思う *oieau*」の語の使い方はそれだけを見ると若干奇妙だ。とごうのは、*oieau* の語は「何を(思う)」あるいは「どうだと(思う)」といった思う内容を示す表現を伴いそうなもののだが、ここにはそれがわからないからだ。しかしこ

の *oieau* が、直前のヘーレーの「私は思うのです *oieau*」を受けたものであることに着目すると、ここでは皮肉の効果を發揮していることに気づく。「お前はそうやって(何によらずなんでも勝手に)『思う』のだ」というわけだ。

ところで、そもそもヘーレーとゼウスの対立の当の原因はアガメムノンとアキレウスの対立だ。そして、アガメムノン・アキレウス間の皮肉も同じ *oie* の語をめぐるものだった。人間の皮肉がオリュンポスの皮肉にまで波及した図である。

D—b「楽しんでる」

メネラーオスとパリスが一騎打ちをする。メネラーオスがパリスを今にも討ち取らんとしたところをプロデューターが介入してパリスを救う。それをオリュンポスからゼウスが見てこ言う。傍らにはヘーレーとアテーネーがいる。

メネラーオスには女神の中に味方が二人いる、アルゴスのヘーレーとアラルコメナイのアテーネーだ。しかしその二人は遠くに座って眺め楽しんでる。一方笑いを賞するアプロデューターはいつも(パリスの)傍にいて彼の死を防いでいる (『イーリアス』第四歌 7～11)

まず、「味方が二人いる」と言っているが、実はその当の二人の傍らで言葉を発しているのだ。「いる *oie*」の三人称がな

んとも皮肉だ。

「そして「楽しんでる」。もちろんそれどころではない。アプロディーテの介入に二女神は怒り心頭なのだ。ゼウスこそ挑発的皮肉を「楽しんでる」。

D—c 「撫でていて」

アプロディーテは更に、ディオメデーデスに討たれんとしていたアイネイアースを助ける。しかしそのディオメデーデスに槍で女神自らが傷つけられる。それをみてアテーネーがゼウスに言う。

キュプリス（アプロディーテ）はアカイア女の誰かを仕向けたのに違いありません、恐ろしく最屑にしているトロイア人達について行くようにと。衣麗しきアカイア女の誰かを撫でていて、黄金の留め金でか弱い手を傷つけたのでしよう（『イーリアス』第五歌422～425）

「アカイア女の誰か」はメネラーオスに随いて出奔したヘレネーのことをあてこすっている。「撫でていて留め金で傷つけたのでしよう」の皮肉は恋愛を事とする女神にいかにもふざわしい。

ところでこの皮肉はアプロディーテに対するものだがゼウスに向けて言われている。これは前項のゼウスのアテーネー

（とヘーレー）に向けた皮肉に呼応している。その時にはアテーネーは「ぶつぶつ」は言ったものの言い返すことはしなかった。巻をまたぎ、数百行隔ててではあるが、その時の皮肉に一矢報いたことになろうか。

D—d 「目の前でのたうちまわっても」

アテーネーが「いまこそヘクトールを討つ時だ」とアキレウスを励まして言う。

彼（ヘクトール）が我々を逃れることはもはやできない、たとえ遠矢のアポロンがどんなに必死になってアイギスを持つ父神ゼウスの目の前でたうちまわっても（『イーリアス』第二十二歌219～221）

アポロンはトロイア最屑でありヘクトールを加護してきた。アテーネーにとってはいわば仇敵だ。「*ἴπποκυβητόθρονος*」目の前でたうちまわって」という長大な単語に揶揄と皮肉が込められている。

E. ヘレネーの皮肉

ヘレネーは自らが戦争の因をなしたことで悔恨に苛まれていく。そのはずのヘレネーが一方意外なことに皮肉のかんりの使

い手である。

E—a「おやめになるようお勧めします」

パリスがメネラーオスとの一騎打ちをのがれて来る。そのパリスに向かってヘレネーが言う言葉の中に次のくだりがある。

前からあなたは軍神の好むメネラーオスに力と腕と槍とで優っていると威張っていましたね。さあ戻ってもう一度軍神の好むメネラーオスに一騎打ちを挑みなさい。いや私はおやめになるようお勧めします、金髪のメネラーオスに面と向かつて戦いを戦い争う無茶はなさらないでください、彼の槍ですぐに斃されるといけませんので（『イーリアス』第三歌430〜436）

「いやおやめになるようお勧めします」の言葉は本心だろうか、皮肉だろうか。

前者とすれば、厳しい言葉を連ねたものの急に情愛がよみがえり、心配になって前言を翻したということだろう。また後者であれば、「やめた方が身のためです、弱いあなた故どうせ負けるに決まっていますから」と皮肉の意となろう。

どちらだろうか。このヘレネーの言葉に対するパリスの返答第一行目が

奥よ、厳しい侮辱の言葉で私の心を責めないでくれ（『イーリアス』第三歌438）

リアス』第三歌438）

となつているところを見るとやはり後者（皮肉説）に分がありそうだ。

とはいえそれでもまだ両方の可能性が残されている。ヘレネーが本心で言ったことをパリスが皮肉と受け取ったこともあり得ないことではないのだから。皮肉は常にこのような両義性を孕んでいる。同じ言葉でもその言葉を発する側に「皮肉の意図がある場合／ない場合」両方の解釈の余地がある。それ故、皮肉の意図があつた場合にもその皮肉が相手に通じない場合があり、また逆に皮肉の意図がなかった場合にも相手がそれを勘ぐることもある。

E—b「報いをうけるでしょう」

ヘレネーが自らの夫パリスを評する言葉の中に次のくだりがある。

あの人には確りとした心はなく、これからもないでしょう、ですからあの人は報いをうけることになるでしょう（『イーリアス』第六歌352〜353）

この「報いをうける」と訳した *εταυρησθηται* に ついても、

単に「悪しきことの結果を被る」という意味でいつているのか、それとも「おかげでさぞかしよい果実を享受する」と皮肉を込めて言っているのか、両様の解釈がありうる。

この *εταυπτοκομα* という語は、多くの場合属格を伴って「属格で示されたものを」享受する」が基本的用法であるが、そしてそれが悪しきものにも皮肉を交えて使われることもあるとされる。^{〔註一〕}

ホメーロスにおいて、明らかな皮肉を込めて「(属格で示された)悪しきものを *εταυπτοκομα* している」例が次の一節だ。

アキレウスは母女神テティスに対し、ゼウスがアカイア勢を懲らしめるよう懇願してくれ、と頼んでこう言う。

傍らに座してそれらのことを彼の神に思い出させて懇願してください、トロイア方に加勢し、アカイア勢が船の艦と海辺に押し込まれ殺されるように、そうして皆が王を享受するように (『イーリアス』第一歌 407-410)

王とはアガ멤ノーンを指す。「(悪しき)王(のおかげでもたらされる果実)を享受するように」の意の皮肉だ。^{〔註二〕}

ところで回り道になるが、この皮肉は誰に向けられたものだろうか。アガ멤ノーンに向けられていることはもちろんだが、

それにとどまらずアカイア勢全体に対してであろう。アガ멤ノーンの横暴に対してアカイア勢の皆はどういう態度をとったか。辛うじて仲裁に入ろうとしたのは老ネストール一人だった。アキレウスが何よりもアガ멤ノーンに怒っているのは確かだが、その横暴を黙って見過ごした他のアカイア勢にも反感を抱いている。孤絶したアキレウス像が浮かび上がる。

少し回り道をしたが、この項冒頭で掲げたヘレネーの例に戻る。

ヘレネーは他の場面でもパリスに対してしばしば辛辣である。ここでも上記アキレウスの言と同様「確りとした心がない、そのことのおかげで(さぞかしよい)果実を享受することになるでしょう」との皮肉が込められているととりたてたい。

E—c 「神の道をはずれ、女奴隷になり」と

不遜の誹りを免れないが、人間であるヘレネーから神に向けた皮肉がある。

前前項(E—a)に先立つ場面、女神アプロディーテーが「パリスが待っていますよ」とヘレネーを呼びに来る。パリスはメネラーオスとの一騎打ちの場を抜け出し(というよりすんでのところであプロディーテーによって救い出されて)館に帰ってきたところだった。

パリスのもとに導こうとするその女神に対し、ヘレネーはこ

ういう言葉返す。

行つて彼の傍らにお座りになつたらいいでしょう、神の道を外れ、もうあなたの足でオリュンポスにお戻りになることはやめて、そしていつも彼のもとで苦勞しお守りなさつたらいいでしょう、彼があなたを妻になり女奴隷なりにするまで（『イーリアス』第三歌406～409）

「神の道を外れ」とか、果ては「女奴隷なりに」とか、なんとも辛辣である。ヘレネーとしてみれば、パリスの誘惑も、その後の戦禍も、もとはといえは女神のせいだとの思いがあつても不思議はない。その思いが辛辣な皮肉を言わしめたものと思われる。愛の女神に対するこの辛辣さはしかし、その誘惑に屈した自らの弱さに対する辛辣さでもある。

ところで神に対して「不遜の誹りは免れない」と言つたが、ヘレネー以外に他に人の神に対する不遜な言動の例はないだろうか。ディオメーデースの次のような言辭はどうだろうか。戦場で彼がアプロディーテーに放つた言葉だ。

引つ込みなさい、ゼウスの娘よ、戦争と戦闘から。か弱い女達を誑かすだけでは十分ではないんですか。もしあなたが戦場でうろろうしていたら、遠くで戦争と聞くだけで震

え上がることになるでしょうよ（『イーリアス』第5歌348～351）

そして実際にこの直後に槍で女神に傷を負わせる。不遜な言動であるには違いない。ただその口撃は直接的であり皮肉の気味合いはない。それはディオメーデースの性格から来るのだろう。ディオメーデースは直情的な若武者であり言辭もそのまま真つ直ぐだった。直情的でありながら言辭にはしばしば皮肉を込めたアキレウスとは好対照だ。

どうもホメーロスの描く人物像には皮肉家と皮肉に無縁な者とがいるようだ。前者はアキレウスやヘクトール、アイアース、オデュッセウスなど多数であり、後者にはネストールやディオメーデースなど少数だ。しかし女性ではヘレネーが前者のほほ唯一の存在であるようだ。

F. 運命の皮肉

ホメーロスにおける皮肉は、登場人物にのみ向けられてあるのではない。誰に向けられたでもない皮肉、それはしばしば運命の皮肉を感じさせる。

F・a「ヘレネーを連れてきたその道中」

ヘカペーはトロイア勢への加護を願うべくアテーネーへの供

物を準備する。ヘクトールが母ヘカベーにそう指示したのだった。

彼女はかくわしい納戸に降りていった。そこにはシドーンの女達の手になる刺繍に富んだ着物があつた。その着物は神の如きアレクサンドロス(パリス)がシドーンから広い海を航海して運び来たつたものだった、高貴な生まれのヘレネーをまさに連れてきたその道中に。そのうちからヘカベーは最も刺繍の美しく最も大きいものをとつてアテーネーへの供物として持つて行つた(『イーリアス』第六歌288〜294)

戦争の原因をなしたのはヘレネー略奪だ。その略奪をして帰る航海の道中得た衣をもつてその戦争での加護を願おうとする。「ヘレネーをまよご」のところは原詩ではΕλενην περとなつている。この小辞περには様々なニュアンスがあるが、主に、先行する語を強調する場合(very, just)、先行する語を対立させる場合(even though)がある。ここはそのうちの前者だろう(そのニュアンスを訳文では不自然な日本語ながら「ヘレネーをまさに」に込めようとしている)。

「まさに」そのような因縁の着物の供物であつてみれば、どうみても嘉納は望み薄だ。案の定少し後で「アテーネーは領かなかつた」とある。この折願は運命の皮肉を語つているようだ。

F 1 b 「糸を紡ぐ」

次の例はどうだろうか。

伝令の神イーリスがヘレネーのところをやつてくる、前夫メネラーオスと今の夫パリスの一騎打ちが始まろうとしていると告げに。

彼女を(イーリスは)部屋の中に見つけた。彼女は二幅もの大きな紫の布地を織つているところで、馬を馴らすトリアア勢と青銅を鍍うアカイア勢との多くの試練を織り込んでいた。その試練とは彼女の故に彼らが軍神の掌のもとで蒙つたものだった(『イーリアス』第三歌125〜128)

自らの運命を紡ぐ。ここには運命に耐える女の姿がある。重い運命の皮肉だ。

F 1 c 「武勳を歌う」

オデュッセウスたち和解使節一行は、アキレウスの戦線復帰を求めべく、彼の陣屋を訪ねる。

彼らは、ミュルミドネス軍の陣屋と船のところにやつてきて、音高き琴で心楽しんでいる彼(アキレウス)を見つけた、それは美しく細工が施され、銀の琴柱が付いた琴で、彼がエーエティオーンの都を滅ぼした時に戦利品の中から得た

ものだった。それで心楽しみつつものふ其の武勲を歌っていた。（『イーリアス』第九歌185～189）

男に誉れを与える戦いから退いているアキレウスが「ものふ其の武勲」を歌っている。ここでは彼自身の武勲も歌われていたのだろうか。そこに「戦いから退いている」アキレウスの場面もあったのだろうか。武勲を歌うアキレウスの像は前項の機を織るヘレネー像と好一對だ。ここにも運命の皮肉がある。

F—d「戦いの睦言」

イードメネウスが自分の副官メーリオネウスに対してこう言うくだりがある。

もし仮にそなたが戦っていて射られるにせよ突かれるにせよ、首の後ろや背中にそれが刺さることはなからう、いや戦いの出会いのもとへと突き進むところを胸か腹かに正面から当たるであろう（『イーリアス』第十三歌288～291）

仮に「出会い」と訳語を宛てた原語 *ἀπαρτίου* の原義は「親密なやり取り」であり、就中男女間の「睦言」などを意味する。^{〔註3〕}

戦いについて使われたときには、甘美な原義は薄れ、「競り合い」の意味になるとの解釈もある。しかし、次の例はどうだろうか。ヘクトールのトロイア勢を戦闘へと駆り立てる言葉で

ある。

であるからして今は誰も皆、真つ向から立ち向かい、倒れるか生きながらえるかだ、これこそが戦いの *ἀπαρτίου* だ（『イーリアス』第十七歌227～228）

ここで *ἀπαρτίου* が単に「競り合い」の意だとしたらヘクトールの言はほとんど同語反復であり意味をなさない。ヘクトールは「勇士にとつて戦いこそが睦言の如く甘美なものなのだ」と言っているのだろう。これを考え合わせると前のイードメネウスの例も含めてが、やはり「睦言」の原義を保っているとみたい。

おぞましいものと甘美なるものとの取り合わせ、「戦いの睦言」には皮肉がある。

ところでこれらの皮肉は誰に向けられたものだろうか。語りかけられ、呼びかけられたメーリオネウスやトロイアの軍勢に向けられたものだろうか。そうではあるまい。誰に向けられたものでもなく、やはり戦いという不条理な運命自体が持つ皮肉ではなからうか。

F—e「戦死者の妻」

伶人の歌うトロイア戦役譚を耳にしたオデュッセウスは思い出に涙する。その様が戦死者の妻の姿の比喻をもつて語られる。

あたかも女が我が夫のもとに倒れ伏して泣くが如くに、その夫は自分の城と軍の前で斃れたのだ、町と子供達を容赦ない日から護らんとして。女は喘ぎ死んでいく夫を見てそのもとに崩れ落ちて鋭く泣きじゃくる。敵が後ろから槍で背と肩をつつき苦難と悲嘆の待つ隸従の境涯へと連れ去っていく。彼女の両頬はこの上なく哀れな悲しみにやつれ果てる。その如くにオデュッセウスは哀れな涙を流した。
〔オデュッセイアー〕第八歌523～531〕

この比喩は比喩自体としてはいささか精彩を欠く憾みがある。「戦争の辛苦を追憶するオデュッセウスの悲しみ」を「戦争で辛苦を蒙る妻の悲しみ」で喩えるものであり、いわば「つきすぎ」だ。よき比喩に期待される飛躍がない。しかし、この比喩には別の見所がある。比喩の中に出てくる戦死者の妻には、他ならぬオデュッセウスの活躍によって攻略されたトロイアの女（就中ヘクトールの妻アンドロマケー）の佛が浮かぶ。そこに運命の皮肉がある。

G. 『イーリアス』第九歌におけるアキレウスの皮肉

『イーリアス』第九歌は「アキレウスへの使節、祈願」とも題され、戦闘場面は皆無だ。しかしそこには、アガ멤ノンのもとから派遣された和解使節とアキレウスとの間の息詰まる言

葉の応酬がある。そして和解を拒むアキレウスの言辭にはしばしば辛辣な皮肉が込められる。

G1a 「あることを心に隠し、他のことを言うようなそんな奴」
まず和解使節団長格のオデュッセウスがアキレウスに対し和解を受け入れるよう熱弁をふるう。しかしそれに対し、「齒に衣着せず言わねばならぬ」の言に続いてアキレウスの口から出てきたのは次の言葉だった。

というのも冥王の門と等しく俺は憎むのだ、あることを心に隠し、他のことを言うようなそんな奴は（『イーリアス』第九歌312～313）

「そんな奴 *κακός*」とは誰を指すのだろうか。あるいは特定の誰彼ではなく「そんな奴全て」なのだろうか。しかしここで単に一般論を言うとは考え難い、仮に一般論だとしても誰かを念頭に置いてのことだろう。真つ先に候補に挙げるのはもちろんアガ멤ノンだ。

もう一つ、面前のオデュッセウスを指すのではないかとの解釈がある。そうとすると相当な皮肉である。この解釈の傍証はいくつかある。

アキレウスとオデュッセウスは武勇の面ではお互い認め合っていたと思われるが、性格は対照的だった。方や直情径行、方

や狡知に長けた策士だ。憎きアガ멤ノーンの意を受けて執弁をふるうオデュッセウスの姿に苛立ったことはありうる。

また、アガ멤ノーンは確かに横暴ではあるが、その横暴さを隠そうとはせず、むしろ強引に押し通すイメージがある。「あることを心に隠し、他のことを言う」といった形容には必ずしも当てはまらない。

明敏なオデュッセウスのことだ、そこに自分に対する痛烈な皮肉を感じし、ギクリとしたのではなからうか。それかあらぬか、その後アキレウスのもとを去るまでオデュッセウスは一言も発していない。

G—b「骨折って成し遂げたではないか」

アキレウスは拒否演説の中で、こうも言う。

(アガ멤ノーンが)先刻承知の俺を試し説き伏せようとしても無駄だ、オデュッセウスよ、そなたや他の王達と共に燃えさかる火から船を守る手立てを考えたらよからう。実際あいつは俺なしでまことに多くのことを骨折って成し遂げたではないか、壁を築きそれに広く大きな堀を巡らし、そこには逆茂木を据えた、しかしそのようにしても殺戮者ヘクトールの勢いを止めることはできまい (『イーリアス』

第九歌 345～352)

「まことに多くのことを骨折って成し遂げた」と持ち上げておいて、すぐそのあとでそれは無駄だと否定している。「骨折って成し遂げた *ἠώριον*」には「苦勞なことに」といった嘲弄を込めた皮肉が感じられる。

G—c「もし気がかりならば」

アキレウスはオデュッセウスに更に言う。

今や俺には貴いヘクトールと戦う気がないのだから、明日、ゼウスと全ての神々に犠牲を捧げ、荷を積み込んだ船を海へと俺が引き下ろす、その時そなたは見るであろう、もしその気がありしてもしそなたにとって気がかりならば、朝早く魚に富むヘレースポントスを俺の船が、中では者どもが一心に權をこぎつつ、馳せていくのを (第九歌 356～361)

オデュッセウスは何とか和解の糸口を見いだそうと腐心している。それを拒否し、そののみならず自らの出立する姿をありありと描き出す。「もしそなたにとって気がかりならば」は、「気がかり」どころの騒ぎではないのだから、容赦ない皮肉だ。

G—d「より王位が高い者を」

もう一つ、アキレウスの拒否演説の中にこういう詩行がある。

アガムメノーンの「和解に応じるなら娘を娶らせよう」との申し出を拒否するくだりだ。

それでも俺がそれを娶ることはない、(アガムメノーンは)アカイア人の中の他の者を選べばよい *ἐλεῖθε*、誰かより彼にふさわしく、より王位が高い者 *βασιλευτέρος ἐστί* をな (『イーリアス』第九歌 391～392)

和解使節を送り出すときアガムメノーンがこう言っていたことが想起される。

彼(アキレウス)は拙者に従うがよい *ὑποστήτω*、いかに拙者の方が王位が高い *βασιλευτέρος εἰμι* か、いかに生まれにおいても年長を誇っているか(を考えて) (『イーリアス』第九歌 160～161)

「拙者が」より王位が高い *βασιλευτέρος εἰμι* と「誰か」より王位が高い *βασιλευτέρος ἐστί* が二百数十行離れて呼応している。そして更にそのそれぞれの直前で「従うがよい *ὑποστήτω*」と「選べばよい *ἐλεῖθε*」がいずれも三人称命令法で呼応している。

アキレウスが和解使節派遣に先立つアガムメノーンの言を耳にしたはずはない。オデュッセウスがそんなことをアキレウス

に伝えたはずもない。ではこの呼応は偶然だろうか。そうではあるまい。

権力をかさにきて横暴に振る舞うアガムメノーン、そのアガムメノーン的なものの価値基準を一言で表せばこの「王位が高い *βασιλευτέρος εἰμι*」になろう。彼の言にある「従うがよい *ὑποστήτω*」の命令調は和解を申し出る側としては尊大に過ぎる。これもアガムメノーン的なものが露呈したものだ。

アキレウスは、アガムメノーンの言を直接・間接に聞いていなかったにせよ、アガムメノーン的なものを既に嫌というほど味わっていた。耳で聞かなかったとしても全身で感じていた。アキレウスはそれに皮肉をもって反撃したものととりえよう。

H. 『イーリアス』最終歌の *ἐπιπροθέων* について

アキレウスがプリアモスにヘクトールの遺体を返還し和解がなった後、こういう場面がある。

足速きアキレウスは彼(プリアモス)に *ἐπιπροθέων* しつつ言った。「外で寝てください、ご老体、ここにアカイア勢の参謀の誰かが来ないとも限りません、彼らはよく私のもとで謀をめぐらすためにやって来るのです、それは例のことです。彼らの誰かが漆黒の速き夜の中にそなた見つけたなら、すぐさま軍の長アガムメノーンに告げるでしょ

う、そうすれば遺体返還の遅延が起ることにしましょ
う」（『イーリアス』第二十四歌 649～655）

冒頭にある *ἐπιπροθέων* については、これまで多くの注釈者、翻訳家が様々な解釈を施している。諸説を二つに大別すれば、「冗談めかした口調で」とする説と「嘲りの口調で」とする説だ。前者であればプリアモスに対するものだ。そこには、戯れに皮肉つぽく脅かすようなことを引き合いに出しつつ、その実相手に対して、夜陰に乗じての退出を容易ならしめようとする気遣いも働いていよう。そのような戯れをするまでに、そのような気遣いをするまでにアキレウスの心は和らいできたことになる。これも魅力的な解釈だ。この解釈であれば皮肉は毒のないものだろう。

後者の説は少数派であるようだがこれもありうる。^{註4} この「嘲りの口調」であれば遺体返還を妨害するであろう味方、就中アガ멤ノンに向けてられたものである。この場面でプリアモスを嘲弄するはずもない。「なにしろあの男と来たら何でも自分の思い通りにしないと気が済まないと来ているのだ」といったアガ멤ノンに対する嘲りだ。そしてそこには毒を含んだ皮肉の口調が感じられる。

この場でアキレウスとプリアモス両者の和解はなったのだが両軍の戦いは終息したわけではない。アガ멤ノンとプリアモスは近くに控えている。今にもこの和解を壊さないとも限らない。前者の

解釈も捨てがたいのだが、後者の解釈に立つと、二人の和解がいかにも奇跡的なものであつたかが一層浮き彫りになる感がある。

1. 『イーリアス』と『オデュッセイアー』の照応

『イーリアス』と『オデュッセイアー』は多くの発想や表現を共有し、随所に照応がみられる。一方の詩人が他方の詩人の作品に汲んだ結果なのか、同一の詩人固有の発想表現が二つの作品に表れたものなのか。皮肉においても同様の照応が見られる場合がある。

1-1 a 「脚がより速くあるように」

テーレマコスがアテーネーに求婚者どもの狼藉を訴えたあとでこう言う。

もしも彼ら（求婚者達）がイタケーに帰還した彼（父オデュッセウス）を見たならば、皆祈ることでしょう、黄金と衣裳とで豊かであることよりも、脚がより速くあるようにと
（『オデュッセイアー』第一歌 163～165）

これに似た皮肉はどこかで聞いたことがある。そう、アイアースがヘクトールに対して言う「逃げるための」馬が鷹よりも早くと祈る」があつた（前述 B-1c 参照）。

I—b「破滅は安泰だ」

オデュッセウスは筏に乗り故郷イタケーを目指す。しかし嵐に見舞われる。

ゼウスは広い天空を何と云で覆い尽くすことか、そして海を掻き乱し、あらゆる風が吹き巻く、今や俺にとって険しい破滅は安泰だ。ダナオイ人達は三倍も四倍も恵まれていた、アトレウスの子のためにとトロイアであるの宿命を落とした者達は（『オデュッセイア』第五歌 303～307）

戦死すれば名誉が残るが、海でおぼれ死ぬのは不名誉な無駄死にだ。

「今や俺に険しい破滅は安泰だ」。これも『イーリアス』のヘクトールの弟パリスに放った次の言葉を想起させる（前述C—d参照）。

今やお前にとって険しい破滅は安泰だ（『イーリアス』第十三歌 773）

『イーリアス』では「お前にとって *τοῦ*」となっていたが、ここ『オデュッセイア』では「俺にとって *μου*」となっている。いずれにおいても *σῶς ὀδύβροσ* は「破滅は安泰だ」の意の矛盾語法による皮肉だろう。前者は弟パリスに向けられた苛立ちの皮肉表

現、後者は自らに向けた自嘲の皮肉表現だ。

J. 求婚者との応酬

J—a「神々が教え込んだに違いあるまい」

テーレマコスが求婚者達に向かって、明日集会を開いて館から退出するよう訴える、さもなければ神々に報いをうけるように祈る、と言ひ渡す。これに答えて求婚者の首領格アンティノスが言う。

テーレマコスよ、いやはや神々自身がそなたに教え込んだに違いあるまい、居丈高になるように、大胆に話すようにと（『オデュッセイア』第一歌 384～385）

テーレマコスが求婚者達に面と向かって退去請求の意思を示したのは、おそらくこれが初めてだった。そのことはこのテーレマコスの発言の直後に「彼らは驚きをもって彼を見た」とあることから察せられる。しかしアンティノスは若輩のテーレマコスを見くびっている。それが「神々が教え込んだに違いあるまい」の皮肉に表れている。

J—b「骨折りが一層増す」

求婚者の一人が仲間たちに言う。

誰が知ろう、もしかして彼（テーレマコス）自身がうつろな船で出立し、身内の者から遠く離れオデュッセウス同様漂流して命を落さぬと、そうしたら俺たちに骨折りが一層増すことになるうぜ、財産を全て皆で分けねばならなくなるのだから、家の方は彼の母親とそれを娶る者に渡すとして（『オデュッセイアー』第二歌 332～336）

「骨折り」と言っているがこれは勿論皮肉だ。難儀なことだとしながら実はほくそ笑んでいるのだ。この言葉はもちろん直接オデュッセウスにテーレマコスに向けられたものではない。しかしオデュッセウスにテーレマコスに対する皮肉な気持ちと言わしめたものであろう。

J—c「どうもあいつの頭から来ているようだ」
乞食（に身を窶したオデュッセウス）は館で燭台の火の世話をしている。そこで求婚者のエウリュマコスが乞食を皆の笑いものにしようにとと言う。

あの男は神意によらずにオデュッセウスの館に来たのではない。とにかく松明の光はどうもあいつの頭から来ているように思える、というのもそこには髪がほんの少しもないのだから（『オデュッセイアー』第十八歌 353～355）

二十一世紀のどこかの職場でも通用しそうな皮肉である。

J—d「戸口が狭いものになってしまっうでしよっうよ」
前項のエウリュマコスに乞食が言い返す。

もしオデュッセウスが故郷に帰ってきたなら、そうしたらたちまちあなたにとってこの戸口が、こんなに広くても、玄関から逃げ出ていくのに狭いものになってしまっうでしよっうよ（『オデュッセイアー』第十八歌 384～386）

単に「逃げ惑うことではしよっうよ」と言ったのでは曲がない。それより「戸口が狭いものになってしまっうでしよっうよ」と皮肉った方が効果がある。案の定、これを聞いてエウリュマコスは「怒り心頭に発する」。

K. 漂流中に

K—a「儲けをむさぼる商人」

オデュッセウスは漂流の途次、パイエーケス人の国において王の歓待を受ける。そこで催された競技会で王の息子ラーオダマスから競技への参加を求められる。オデュッセウスは心労でとてもその気になれないとして断る。ラーオダマスに次ぐ強者エウリュアロスは言う。

なるほどお客人、あなたは世に多くある競技に心得のある方とはとてもお見受けしかねますな。いや、權多き船で行き来し、商売を事とする船乗り達の親分として、積み荷に氣遣い、帰り荷と暴利を見張っている方だ、あなたはとても競技をなさる方とは見えない（『オデュッセイアー』第八歌 159〜164）

この皮肉はあからさまな侮辱だ。さすがにオデュッセイアーは腹に据えかねたと見える。やおら立ち上がって円盤を振り回して放ると、円盤は並み居る者たちが恐れて身をかがめる頭上を唸りをあげて飛び、落ちたところは他の誰のよりもはるか遠くだった。

K—b「我が名はダレモオラヌ」

単眼の巨人ポリュペーモスにまつわる挿話。痛快きわまる、策に富んだオデュッセウスの面目躍如の挿話だ。

巨人に捕らえられたオデュッセウスはその名を問われた時、先を見越して「我が名はΟὐρανός（ダレモオラヌ）」だと名乗る。巨人に食われ多くの部下を失ったオデュッセウスは巨人に復讐し単眼を焼きつぶす。巨人は大声をあげ仲間を呼ぶ。仲間がそれを聞きつけやって来て問う。

「ポリュペーモスよ、どんな目に遭ったからといってそん

なに叫ぶのだ、清らかな夜中に我々の眠りを妨げて。人間の誰かが無理矢理お前の羊たちを掠って行くとてもいいのか、あるいは誰かがお前自身を謀でか力づくでか殺すともいいうのか。」そこで強力なポリュペーモスは洞窟から答えて言う。「謀でも力づくでも俺を殺す者は『ダレモオラヌ』。」彼らはこれに対して翼ある言葉を返して言う。「もし独り住まいのお前を害する者が誰もおらぬのなら（定めし病気であろう）、ゼウスから来る病気は避けようないもの故、父なる神ポセイダーオーンにでも祈りを捧げるのがよからう。」（『オデュッセイアー』第九歌 403〜412）

そう言い残して仲間たちは立ち去ってしまった。

この著名な挿話は皮肉の挿話とも読める。名は存在を示すものであるはずなのだが、この名「ダレモオラヌ」は不在を示している。形而上的皮肉だ。

K—c「お前は主人の眼を掉んでくれるのか」

巨人がただ一つの眼をつぶされた翌日、羊たちが巨人の洞窟から出ていく。巨人は痛みに耐えつつ手で一頭づつ背をさすって送り出す。最後に群れ一番の山羊が出ていく。その山羊の腹には実はオデュッセウスが取りついていたのだった。

愛しい羊よ、どうしてお前は洞窟からそうして最後に出て

行くのか、これまでは決して他の羊たちに遅れて行くことはなかったのに。それどころか、真つ先に大股に進んで牧草の柔らかな花を食っていたし、一番に川の流れに行き着いていたし、夕べには一番に開いに帰りがついていたではないか。ひるがえって今はしんがりだ。ああ、お前は主人の眼を悼んでくれるのか、悪者が潰したこの眼を（『オデュッセイア』第九歌447～453）

お気に入りの羊にありうべくもない情愛を巨人に夢想せしめている。無法者のことではあるが思わず哀れを誘われる皮肉だ。

L. *ádatoc* に含まれる皮肉

ádatoc は印象的な単語である。*áda* と *α* が語頭から三つ並び、辞書でも *α* のすぐ次に登場する。ターザンか何かの掛け声でもない限りどの言語でも *áda* と三つ並び例はないのではないかと思われる。

ホメーロスで使われるこの *ádatoc* の語の語義については確たる定説がなく、いくつかの解釈がある。そのような中で、先ず *ádatoc* の語源については、語頭の接頭辞 *α* を除いて、「狂気、欺瞞、害」などを意味する *ádi* にあるとするのが大勢だ。そして語頭の接頭辞 *α* を否定・欠如の接頭辞とするの見解が有力だ。この組み合わせによって「偽りようのない that cannot to

be taken in vain、決定的な *decisive*、害のない *harmless* などかなり幅広い語義が想定されている。しかし例えば「決定的な *decisive*」と「害のない *harmless*」では相当なニュアンスの違いがある。ほとんど対義語と言ってもいいくらいだ。

『オデュッセイア』においてこの *ádatoc* の語は二回登場する。いずれの箇所も上記多義性も与って解釈は諸説紛々なのだ。「皮肉」の観点からもっとも相応しい解を考えてみたい。

一回目の登場は対格 *ádatoc* の形で求婚者の口から出る。

ペーネロペイアは弓と的を求婚者達の前に置かせる、的を射通し得た者に嫁ぐと言つて。豚飼と牛飼はオデュッセウスの弓を見て泣く。それに対して求婚者の一人アンテイノオスが言う。

静かに座つて食事している、さもなければ外に出て行って泣け、そこに弓を置いて、求婚者達に *ádatoc* な競技（の具 *α* を（置いて））。というのも思ふからだ、このよく磨かれた弓を張るのは容易ではないと（『オデュッセイア』第二十一歌 89～92）

この「*ádatoc* な競技」については、求婚者達にとって婚決めの帰趨を決する競技であるという意味で「決定的な競技」と言っているとするのが分かりやすく自然だろう。

さてもう一箇所は上記から巻を隔てた第二十二歌で、オデュ

ツセウスの言葉の中に出てくる。

オデュッセウスはついに討伐に立ち上がり、求婚者達に弓を構え、言い放つ。

この *dataros* な競技はもうおしまいだ、今は別の的だ、誰もかつて射たことのない(的だ)。見てみよう、射当てることが出来るか、アポロンが私に誉れを与えて下さるか
〔『オデュッセイアー』第二十二歌5〜7〕

dataros に対して上記アンティノオスの時には「決定的な decisive」の語義をあてた。この詩行ではどうか。先に見たように語源的にいつて *dataros* には「害のない harmless」の語義も考えられた。そしてこの箇所はまさしくその語義の広がりを利用したオデュッセウスの皮肉と取りたい。すなわち、「お前達は *dataros* という言葉を使っていたな、脳天気にも『婿決めに決定的な *dataros* 競技』のつもりで使っていたのだろうが、『そんなお前達に害のない *dataros* 競技』はおしまいだ」と言ったとするのだ。

するとこれは、数百行を隔ててアンティノオスの発言を踏まえた皮肉である。〔註5〕

M: 豚飼の皮肉

豚飼のエウマイオス像は両詩篇の数ある登場人物像の中でも傑作の一つだ。その人物造形の一翼を担っているのが彼の皮肉だ。

M— a 「さぞ心置きなく」

乞食に身を賣したオデュッセウスが豚飼エウマイオスの小屋に来てゐる。乞食(オデュッセウス)は「オデュッセウスはきつと帰ってくる」と言う。豚飼は信じない。乞食は、もし自分の言うことが嘘だったなら、岩から突き落として殺してくれと言う。それに対して次の豚飼の言葉が来る。

客人よ、もしそうしたならわたしにはよい評判と立派な名が、すぐにもそして後々までも、人々の間に伝わることになることだろうて。もし、お前さんを小屋に導いて客人としてもてなしながら、今度は殺して大事な命を奪ったりなどしたら、そうしたらわたしはさぞ心置きなくクロノスの子ゼウスにお祈りすることが出来るだろうさ〔『オデュッセイアー』第十四歌402〜406〕

「よい評判と立派な名」もそうだが、それにも増して「さぞ心置きなく」は皮肉だ。豚飼は乞食の話をつんから信じていない。

しかし相手が「命を懸ける」とまで真剣なので、それを思いや
つて皮肉で(それも自分に向けられたかのような皮肉で)受け
流している。こういう皮肉を使う豚飼はよほど懐の深い人物で
あるようだ。

M—b「さぞかし楽しいことなのでしょう」

豚飼は旅から無事帰還したテーレマコスと再会し、うれし涙
を流して抱きつき、こう言う。

さあすぐにお入りなさつて、愛しい若様、よそから今ここ
にお帰りの姿を眺めて心に喜びたいのです。というのも田
舎にも牧人達のところにも滅多にお越しにならない、いつ
も町中におられる、あなたにはさぞかし心に楽しいことな
のでしょう、求婚者共の見るも厭わしい群を見るのが(『オ
デュッセイア』第十六歌25〜29)

「さぞかし楽しいことなのでしょう」と、そう思っているわ
けでは勿論ない。皮肉だ。豚飼とテーレマコスの間には身分の
違いを超えた親密さがある。親密さゆえの皮肉だ。

M—c「天にまで達している」

乞食(に身を賣したオデュッセウス)が豚飼に言う、オデュ
ッセウスの館の求婚者達のところに物をいに行こうかと思う、と。

それに対して豚飼はこう応える。

お何と、客人よ、何で心にそんなことを思うのか、それ
ともお前さんはそこでそれこそ死んでしまいたいと思っ
ているのか、求婚者達の群に入っていこうなどとすると
は。そいつらの傲慢と横暴のほどは鋼の天にまで達している
(『オデュッセイア』第十五歌326〜329)

「傲慢と横暴のほどは天にまで達している *ὄψις τε βίη τε*
ὀργάνων ἴκει」これは「名声が天にまで達している *νόστος*
ὀργάνων ἴκει (『イーリアス』第8歌192、『オデュッセイア』
第9歌20)」の皮肉を込めたパロディーだろう。

M—d「柔らかい床」

広間でオデュッセウスが求婚者共を誅殺しているとき、納戸
ではオデュッセウス側の豚飼が求婚者側の牛飼メランティオス
をふんじばり、天井の梁から宙吊りにする。メランティオスは
オデュッセウスと豚飼に対して散々悪口雑言を浴びせた男だっ
た。そこで豚飼は言う。

メランティオスよ、まったく今こそこうして夜番をするが
いいさ、お前にふさわしく、柔らかい床で寝てな(『オ
デュッセイア』第二十二歌195〜196)

宙吊りなのだからこれほど「柔らかい床」はあるまい。毒が込められている。豚飼の皮肉も敵に対しては辛辣である。

以上豚飼の四つの皮肉を取り上げた。それぞれに込められたものに特徴があり、あえていえば、一つ目は思いやり、二つ目は親愛、三つ目は糾弾、四つ目は敵意ということになるうか。

N. 『オデュッセイアー』最後の皮肉

『オデュッセイアー』最終歌において、求婚者誅殺を終えたオデュッセウスは田舎の老父ラーエルテースのもとに行く。ラーエルテースはみすぼらしい姿で畑仕事にかかっている。そこでオデュッセウスは旅人を装って声をかける。

おおご老人、あなたは果樹園の手入れをするのに心得のない方ではないな、世話が行き届いている。全くどの果樹も、無花果も、葡萄も、オリブも、梨も、野菜も、園中世話の行き届いていないところはな。しかし一つ言いたい、どうか心に怒らないでくれ。あなた自身にはちゃんと世話が行き届いていないな。あなたは忌まわしく老いばれ、ひどく干からび、みすぼらしい身なりだ（『オデュッセイアー』第二十四歌 244～250）

「世話が行き届いている」と「世話が行き届いていない」の対照。軽い皮肉である。

あとがきに代えて

こうしてホメーロスの詩篇に登場する皮肉の例を抜粋してみると、それはさながら「皮肉辞典」であるかの如き様相を呈してくる。さてその「皮肉辞典」を閉じるに当たり、あとがきに代えて『オデュッセイアー』の中にある一つの謎について考えてみたい。

その謎というのは、他でもない本文最後で取り上げた、オデュッセウスの老父ラーエルテースに対する皮肉の場面にまつわるものだ。そこでは「軽い皮肉である」と簡単に済ませただが実は大きな問題をはらんでいる。

そのオデュッセウスの皮肉の言葉のすぐ前にはこういうくだりがある。老父の姿を見てオデュッセウスは「すぐ抱きつき一部始終を明かしたもののか、それともまずいろいろ尋ね試したもののか」と心に迷い、そしてこう決める。

そのように思案している彼にこうするのがよりよいと思えた、すなわち先ず *κερτοῖσιν* な言葉で試してみるのが（『オデュッセイアー』第二十四歌 239～240）

なぜここで「試す」必要があるろう。何を試そうとするのか。ラーエルテースが敵意を抱いているはずもない、迷うまでもなく一刻も早く「抱きつき明かし」たらいよいではないか。

それを迷った挙句遂には、「keproiōticな言葉で」試そうと決し、旅人を装って先に引用した「世話が行き届いている、世話が行き届いていない」の皮肉を投げる。この「keproiōticな言葉で」の詩句は「意地の悪い文句を言いかけ」（呉訳）、「鋭い言葉で」（高津訳）、「冷やかすような口調で」（松平訳）、「with mocking words」（A. T. Murray）などと解されているが、いずれにせよ心無い仕打ちである。

さらにその皮肉に続いてオデュッセウスは自らの偽りの出自を述べ、「オデュッセウスに会ったことがある、五年前に別れた」との作り話をする。なぜこのような嘘八百を述べ立てるのか。案の定ラーエルテースはこれ聞いて息子の運命を悲観し、悲しみの黒い雲に包まれ呻きつつ黒土を白髪に振りかける。聴衆・読者はオデュッセウスの意図を怪訝に思い、ひいては憤りさえ感じかねないところだ。

なぜオデュッセウスはここでこのような言動をとったのか、大きな謎である。この謎については、古来の難問として諸家が解明を試みてきた。しかし謎の大きさを前に難渋しているようだ。

例えばA. Heubeckは、オデュッセウスに父親を試す意図はなく、その言葉は息子の認知に導くために計算されたものだったとする。しかしこの解釈も、「意図はない」とするのは素朴

な聴衆・読者の印象からは隔たっており、「計算された」準備の必然性についても十分説得力があるとはいえない。^[註1]

そのような中でR. Hexterの説に注目したい。R. Hexterは、オデュッセウスが父親を試す必要が何故あったかについて「満足な答はないようだ」と率直に認めつつ、こう付け加えている。「オデュッセウスは止まることができなかった、オデュッセウスであることから逃れることはできなかった……オデュッセウスは常に根っからの狡知の人だった」と。^[註2]

この指摘の意味を本稿筆者の理解するところによって言い直すところなる。すなわち、「何故父親を試す必要があったか」を問うことは無駄である、必要はそもそもなかったのだから、そしてその無用な言動はオデュッセウス持ち前の狡知がなせる業であった、と。この指摘は正鵠を射ていると思われる。ここに謎解明の鍵があるようだ。問題は、このような無用のことをなすオデュッセウス、聴衆・読者の反感を買いかねないオデュッセウスを詩人が何故敢えて描いたかだ。そこところはR. Hexterも触れていない。筆者にとっても問題として残されていたのだが、今回「皮肉」の観点から両詩篇を読み返していて、ひよっとしたらと思いついた仮説がある。それを最後に述べて識者の批判を仰ぎたいと思う。

オデュッセウスはR. Hexterも言うように「策に長けた rolyūntic」という枕詞そのものの男だった。「試す」ことが好きであり「嘘」が得意だ。この男は無論武勇でも傑出していた

のだが、なにより「狡知」において第一人者だった。戦いの場において、帰還の旅路においてその狡知は彼の最大の武器だった。しかし、帰還が成り、求婚者誅殺が成った今、故郷においてその平時においてどうだろうか。家族に対し、国の民に対し「狡知」を働かせ「策」を巡らし続けるべきなのだろうか。

オデュッセウスは、帰還がなり求婚者成敗がなった今も、老父に対し「試み」そして「嘘」をついている。自ら創造した人物像でありながら自己運動を始めたその姿を見て詩人は、聴衆・読者と困惑の思いを共有している。苦笑しつつ「オデュッセウスよ、お前は相変わらずだな」と呼びかけている詩人の声が聞こえてきそうだ。この一節は詩人のオデュッセウスに対する皮肉だったのではなからうか。

【註2】 呉茂一訳では「あの王さまの有難みがよく味わえるよう」となっていて、皮肉な調子が意識ながら巧みな日本語に移されている。

【註3】 母女神ヘーレーから愛の武器を求められたとき、愛の女神アプロディーテーが取り出した秘密の「帯」には「愛」や「憧れ」と共にこの「睦言 *ἀπορτίτυ*」が込められていた（『イーリアス』第十四歌216）。

【註4】 A. Pierron 邦訳 *L'Illiade d'Homère* (Hachette, 1869) の注釈においてその後者の（味方に対するもの）の「解釈をとっている。また松平千秋はその『イーリアス』訳（岩波、2004）本文では前者の（プリアモスに対するもの）の「解釈を採用しつつ訳註において後者の説を紹介している。」

【註5】 本文で述べたのとは別の皮肉を読み取る解釈もある。

W. B. Stanford の *The Odyssey of Homer* (Macmillan, 1971) の註記「それとそれを敷衍した A. Heubeck の *A commentary on Homer's Odyssey* (Oxford, 1992) の説は概略以下のよう解釈している。すなわち、アンティノオスの発言にある *ἀάρατος* について、先ずは接頭辞 *α* を通説のとおり否定の接頭辞ととりつつ、アンティノオス自身は「害のない *harmless*」の意味で言ったとする。しかし同時に、接頭辞 *α* が強意の接頭辞である可能性にも触れ、聴衆はそちらの解釈に立つとアンティノオスの *ἀάρατος* が「害をもたらす *harmful*」な意味になることに気づくであろう」とそれは求婚者自身が自らの運命を無意識に予告した

註

【註1】 P. Chantraine 邦訳 *Dictionnaire étymologique de la langue grecque* (Klincksieck, 1977) において *ἐπιουπίοτοκος* について「語源は不明」としながら、「受け取る、達する、味わう、利用する *toucher, atteindre, goûter, profiter de*」の語義を与え「しばしば皮肉な意味で」と注記している。

ことになる、そこには皮肉がある、とする。

魅力的な解釈であり、これもあり得る。ただ、アンティノオス自身が *dauros* を「害のない *harmless*」の意味で言ったとすると、第二十二歌でのオデュッセウスの「この *dauros* な競技はもうおしまいだ」は「*harmless* な競技はおしまいだ」とそれに対する正面切っ手の否定となり、そこでの皮肉の意味合いは薄れる。オデュッセウスの言が皮肉の毒を含むためには、本文のようにアンティノオスに「決定的な *decisive*」の意味で言わせておいた方がよいようである。

【註6】 A. Heubeck はこの一節について前掲書において次のように述べている。

「彼(オデュッセウス)の意図は彼の父親を試すことにはない、そして『からかいの』『あざけりの』『はすかしめ』あるいは『心ない残酷な言葉』を以てそれをする。ことには決してない。そして実際そのような言葉はどこでも使われていない。その反対に、オデュッセウスの言葉は、それが持つ真実を隠すと同時に露わにする性質によって、首尾一貫父親に内的変化を引き起こすべく、そして彼による認知を可能ならしめるべく計算されているのである」

この謎について詩編のライトモチーフである「認知」の視点から解明を試みた興味深い解釈だ。ただ、一つの合理

的説明の試みではあるが疑問は残る。

「からかいの」「あざけりの」「はすかしめ」あるいは「心ない残酷な言葉は使われていないとしているが、そう言い切れるかどうか。確かに毒のある言葉ではないが、本文でみたように、少なくとも軽いからかいがあることは否定しがたい。軽いからと言って罪が軽くなるわけではなからう。また、認知に向けた準備であったとしても、一時老父に「白髪に土をかふる」ほどの悲嘆を与えた事実が消しようがない。そこまでして名乗りを遅延させることが本当に必要なことかどうか……聴衆・読者の抱く素朴な疑問を必ずしも拭い切れるものではないようだ。

【註7】 R. Hexter, *A Guide to the Odyssey* (Vintage, 1993)
引用箇所原文は以下の通り。

Why does Odysseus feel he needs to "test" his father? ... There appears no satisfactory answer. ... Odysseus cannot stop, cannot escape being Odysseus. ... Odysseus is at bottom always tricky.